

私が通った幼稚園・保育園 (13)

保育園、甘き思い出

伊集院 郁夫

バス通りの光に照らされた黒い人影が保育園の門を

くぐり、ゆつくりとこちらに近づいてくる。「おむか

えだ」ポーツとそう思う。保育室の蛍光灯の光は冷た

い。部屋には何もなく、だあれもない。「走って

よ」。

それでも黒い人影はゆつくりと、ゆつくりと歩いて

いる。やっと顔が見えた。今日の迎えは「お父さん

か」。

今から五十年近く前に通った保育園時代の思い出を

ひとコマである。

母の直訴

私が通った「あさがや保育園」は、一九五四年四

月、三歳児から五歳児までの園児四十三名と、園長を

含めた職員六名で、園名からもわかるように、東京都杉並区の阿佐谷の地で開園された社会福祉法人立の保育園である。この保育園の歴史については、保育園史や故三輪政太郎先生の遺稿集に詳しくあるので、ここでは省く。もつとも、私自身、それについて、詳しく調べたこともないので、よくわからないというのが正直なところである。ただ、明治からの民間社会福祉事業の精神が受け継がれてきたと思うのは、開園からわずか三年後の一九五一年に、当時としてはまだめずらしい、ゼロ歳児保育をはじめたことからもうかがい知ることができる。

「あさ保（阿佐谷保育園の略）がゼロ歳児保育をはじめたのは、昭和三十一年、つまり、開園して三年目から。当時『あさ保』と同じ法人の経営の診療所が近くにあった、何かあるとお医者さんがすぐとんでこれるといふ関係にあった、これがゼロ歳児をやられた条件。それにしてもゼロ歳をやるようになった

きっかけは、地域のあるお母さんの、直訴から。銀行に勤めていた人だったけど、食べるためには子どもを産んでも働き続けなければならぬ、何とかしてゼロ歳をやってほしい、とねじこまれた。それで、ああそうか、では、ということになって、ゼロ歳児二人からはじめることになったわけです」

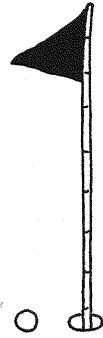
（三輪政太郎遺稿集）

と、ゼロ歳児保育をはじめようになった経緯を当時の園長は記しているが、その「ねじこんだ」母親というのが、当時、銀行でもばりばりの活動家であった私の母である、その押し強さは言わずもがな。温和な園長がその勢いに負かされ、つい「わかりました」と了解してしまった様子が手に取るようにわかる。

ともあれ、そういう理由から通うようになったのが、私の保育園歴のはじまりである。

しかし、こういう歴史的出来事の当事者の私だが、残念ながらその時の記憶がまったくない。もしそのこ

とを回顧できれば、保育の歴史に少しは寄与できたはずなのに残念である。



ある。とともに「まったく覚えていません」としか書けないことに申しわけない思いすらする。特に、二人からはじめられたゼロ歳児保育なのに、初めて友人になった相手が、男子だったのか、女子だったのかさえ覚えていないのだから、保育園時代を語る者としては失格である。本当は、「やさしい先生の柔らかい手でおしめを変えてもらう時が、最高の幸せでした」程度のことは書きたいのだけれど、やはり、あさ保の卒園児は正直者という印象を残すことが今、在園する幼児後輩のための最低条件であるのでやめておくことにする。

さて、今回いただいたテーマは「私の通った保育園」。前述したが、五十年近く前の記憶である。だか

らまことに勝手な記憶とおことわりして、ぼつりぼつりとまだらに残る記憶をたどってみることにする。

当時のこと

私の生まれた昭和三十年代といえ、一九七三年の石油ショックまで続いた高度成長期に日本が入っていく頃である。つまり「北」と「南」に分断された朝鮮民族同士の戦争があり、それに便乗するかのようになつていった時代である。また、それとあわせて、産業界からは、技術革新と経済成長のために必要な人的能力を確保するという立場から、教育改革が執拗に迫られた頃でもある。

街には東京タワーが建設され、テレビ放映がはじまるが、テレビそのものが各家庭にない時代。最近流行った映画「ALWAYS 三丁目の夕日」そのものの庶民の生活があった時代である。

そうした時代に過ごした私の保育園の印象は、清楚で、かわいらしいというより、むしろ「社会派」の生括くさい保育園で、なにか物言う人々が多くいたような感じのする保育園という印象が残っている。実際に当時、民間の教育運動も盛んで、それぞれに教育実践を含め、社会に意見表明をする教師が多い時代である。あさがや保育園史を読んでも、職員にもその影響がなかったとはいえない。

またあわせて、我が家の一風変わった家庭環境も、そういう印象をもたせる手助けを少なからずしていたと思う。先程の母親もしかりだが、父親も「千万人といえども吾往かん」というタイプの人であったので「君は正しく生きているのか」というような説教(?)が子どもの頃から繰返される家であったからだ。

まあ、簡単に言ってしまうと、くそまじめなインテリが、子どもにでれーっともできず、かといって、昔風に威厳を保つ振舞いもできずとまどっていた、とい

うことなのだが……。

話がそれた。保育園に話を戻す。社会派と感じた出来事のひとつを覚えている。

年長になった頃の夏の晩であったと思う。保育園の園庭に大きなスクリーンが設置され、映画会が行われることになった。いったん帰宅してからその映画を両親と観に出かけることになる。夜出かけるということ、当時の私にはかなり興奮する出来事であった。

ましてやその頃は、両親と夜の外出をするなどめったにないことだったので、なおさら興奮していた。

夜の園庭には、わざわざと人が集まっていて、普段とは違う賑わいがあった。そうなる子どもとしては、じっとしてなどいられるはずがない、その人ごみの中を意味もなく走りまわった。ただ走る、それだけで楽しかった。映画を観にきたというより、縁日の賑わいの中にある気分になっていたのだと思う。

さて、いよいよ開演時間。リーンと開始を報せるべ

ルの記憶はないが、大きなスクリーンに映し出された画面と音響には迫力があり、はしゃいでいた子ども達もいつしかスクリーンにむかっていた。そして映し出されたのは……。なんと、当時のベトナムの状況を伝えるドキュメンタリー映画であった。

がっかり、見事にスカである。子ども向けの映画ではまったくない。当然家に帰りたくなかった。それもすぐに。しかし、両親にはそんな思いなど通じていなかった。結局、最後まではいたようだが、私の記憶には、「映画会があった」「早く帰りたい」という記憶しか残っていない。

それにしても、保育園も随分と思い切ったことをしたものである。時代がそういう時代であったのかもしれないが、今その類の映画を園庭で上映する保育園など、たぶんないのではないか。まったくもって、すごいところであり、あわせて、すごい親が集まっていたということである。

保育実践

まあしかし、あまりこういうことばかり書き連ねると、園が誤解されそうだが、日常は、みな普通に過ごしていた。あたりまえだが、誰しもがスーパーマンやお姫様であり、泣き笑い、傷だらけになって動きまわるガキの集団そのものだった。

当時の保育は「六領域のようなプログラムでやっていた。印象深かったのは、幼稚園では音楽はメロディの美しい歌曲といった歌が多かったけれど、『あざ保』では生活と結びついた歌が多かった」というのは、私たちの担任の回想である。そう、そう、そう、例えば、威勢のいい歌をうたっていた記憶もある。で、そうなる。「ほら、やっぱり」となってしまうのだが、保育実践の草創期、やはりその時代を生きる保育者の試行錯誤が繰返されていたのだと思う。

もともと、万能の保育・教育の方法や指導などはあ

り得ない。指導の手だて・方法は、ある限定された実践的なねらい・目的のために工夫され考え出されるもので、それが達成されたなら、次に向かつて実践は変化・発展しなければならぬのだから、今ほどの保育条件がなかった保育者の苦労は大きかったのではないかと思う。ちなみに六歳違いの弟も同じ園に世話になったわけだが、その間の実践内容は、私たちとは随分と違ったものになっていたように感じた。

体を張って子どもを守る時

さて、冒頭に書いたが、私自身、今でいう延長保育の子どもであり、時には二重保育を受けたこともある。だから、寂しくはなかったかと問われれば、「まったく平気」だったとは言いがたい。やはり、先に帰宅する友をうらやましく思ったことは正直ある。それでも保育園が嫌いになったことはない。なぜか？ そう思わせる情熱をもった保育者がいたからだ。そし

て必死に生きていた親たちが、一風変わったかわり方であったかもしれないけれど、体を張って、私たちがどもに向かい合ってくれていたことが大きい。今、子どもに関する政策が変化しようとしている。体を張って子どもを守ることがどういうことか、再び考えなければならぬ時代ではと思う。「子育ては世直しにつながる」。大田堯氏の迫力のある言葉である。

あれっ、つい熱くなってしまった。これも遺伝？
了。

(新読書社)

参考

「あゆみ」あさがや保育園三三年史 一九八七年

「人間・愛・闘い」三輪政太郎遺稿集 一九九三年

(文中の「あさ保」は阿佐谷保育園の略称)